

## 成果と課題

### 1 研究の成果

#### ○ ICTの活用

一人一台端末が導入されて3年目となり、3～6年生についてはICT端末を使いこなし、多くの教科・学校生活の場面で活用することができている。1・2年生についても発達段階に応じて、端末の使い方に慣れ親しんでいる段階である。

今年度の研究内容に組み入れたことで、外国語活動・外国語科でICTを積極的に活用することができた。低学年では、活動の成果を記録媒体として活用し、児童の振り返りへとつなげることができた。中学年では、

今まで紙媒体を使って活動していたものから変えたことで、動作性が高まり、本来の目的であるやりとりの時間を確保することにつながった。高学年では、自分たちの発音などを客観的に評価することができ、コミュニケーション能力の向上につながった。外国語活動・外国語科で得られた成果を他教科でも生かす場面も見られ、今後の活用の幅の広がり期待したい。

しかしICT端末はあくまでも学習道具であることを忘れてはならない。これをきっかけに授業内の活動に興味をもつ児童はいた一方で、真の学習動機へとはつながっていない。児童も教師もICTを道具として上手く使うことで、学習の効果を高めていくことができるだろうと考える。



#### ○ 外国語活動・外国語科への授業作りの考え方の共有

今までの新本小で築いてきた外国語活動・外国語科の指導の基本について改めて共有したことで、授業作りの基本について考えることができた。今年度、初めて外国語活動・外国語科の研究に取り組む教師もおり、まず新本スタイルの外国語教育の指導に取り組んだ。ノートルダム清心女子大学 准教授 福原先生によりの確なアドバイスをいただいたことは、教師の外国語活動・外国語科の授業力に大きく寄与したと考える。この授業作りの考え方を基本とし、



今後の外国語教育に生かしていくことができると考える。

## 2 今後の課題

### ○ 課題設定の工夫

研究主題の副題として、「本物で必然性のある外国語活動・外国語科を通して」と設定している。本物とは、目的意識・相手意識・必然性を感じる課題設定から、児童がもっと英語を使ってみたいと真に感じることである。授業研究により、各学年工夫した課題設定に取り組むことができた。しかし、振り返り等で「楽しかった。」「できた。」だけにとどまっている児童もいるのも現状である。「楽しい」「できた」からさらに、「もっとこうしてみたい。」「これに生かせようだ。」につながる課題の必然性を高めていく必要があると感じた。これは、「研究仮説<sup>1</sup>」目的意識や相手意識・必然性を感じる課題設定を考えることで、児童が主体的に学びに向かい、様々な事柄への見方・考え方を広められるようにするだろう。（新本オリジナル）」に関係している。目的意識・相手意識・必然性を感じる課題設定を意識しながら授業実践できるように取り組んでいきたい。

### ○ 指導と評価の一体化

昨年度に引き続き、「指導と評価の一体化」には課題が残った。これは、「研究仮説<sup>2</sup>」児童に到達してほしい姿を示し、課題においてどのような姿を目指すのかを、児童と教師の双方が理解しながら活動することで、『学びに向かう力、人間性等』を高めることができるだろう。」に関連している。今年度の実践では、多くの学年で児童の学びへの意欲の向上となるような教師の仕掛けを取り入れてきた。英語アンケートによると、「英語の授業のめあてを達成できるように意識しながら学習していますか。」の問いに肯定的に回答した児童が89%いた。しかし、「英語の学習に進んで取り組んでいますか。」の問いに肯定的回答した児童が84%にとどまった。授業のめあてに対する意識はあるものの、英語に対して真の「学びに向かう力」の向上に必ずしも直結していないと考えられる。目標－指導－評価のPDCAサイクルを大切にしながら、今後も授業の在り方を考えていく必要があると感じた。